



主の昇天 (マルコ 16:15-20)

主は今も共にいて、働いてくださる

主の昇天の祭日を迎えました。選ばれた朗読箇所から、弟子たちの派遣に注目してみたいと思います。弟子たちはイエスから派遣され、派遣された先で、復活した主の現存を感じ、またそれを次の派遣先で伝えることとなります。

先月の終わりだったでしょうか、木曜日の朝ミサをしていたときに「ん？この人は浦上教会の信者さんのようだが」と思う人を見かけました。でも浦上の信者さんが浜串の朝ミサにいるはずないよねーと思いつつも、気になったのでミサから帰るその人に声をかけてみました。「もしかして、杉山工務店の杉山さんですか？」

「覚えてくれていましたね。」「やっぱりそうだ。いや一似ているなあと思って。旅行ですか？」「姉に会いに来ました。」「今も働いているのですか？」「いや、がんを患ったので仕事は辞めました。でも信仰のおかげで病を克服しました。」「大変でしたね。わたしは今でも高尾地区の集会で披露してくれた歌を覚えていますよ。曲がりくねった道。」

浜串でばったり会ったこの人は、当時高尾地区の集会のたびに一風変わった歌を披露してみんなを喜ばせていたのです。正確に覚えているわけではありませんが、次のような歌でした。「昔あるところに、背の高い小人がいた。背の高い小人は、曲がりくねったまっすぐな道を、上へ上へと下って行った。」続きがありますが、ここまでしか覚えていません。

奇妙な歌でしたが、いつも杉山さんがこの歌を披露して、だれもがこの歌に引き込まれていきました。当時は「ユーモアにあふれた歌」それくらいしか思っていないでしたが、思い出すと味わい深い歌だと思っています。

主の昇天について朗読箇所が教えることはわずかです。「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。」(16・19) おそらく、福音記者はイエスがどのように天に上げられたかにはそれほど興味がないのでしょう。

昇天の詳しい様子よりも弟子たちを派遣し、弟子たちの語る福音を信じる者に伴うしるしを詳しく語っています。それは、イエスが天に上げられても、弟子たちとの結びつきは何も変わらないから安心しなさいと言いたいのだと思います。

「信じる者に伴うしるし」ですが、一つ一つの例よりも、これらはイエスが共にいなければ決して起きない出来事だということが大切です。復活した主は、弟子たちと共に働くのです。

しかし一つ問題があります。弟子たちは復活した主を見たときに全面的な信頼を寄せていたわけではありませんでした。今週の朗読箇所の直前、マルコ 16 章の 14 節には「その後、十一人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。復活さ

れたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」とあるからです。

イエスは天に昇られ、弟子たちを派遣し使命を果たさせますが、弟子たちが復活したイエスを全面的に信じていたから派遣したわけではないのです。派遣された弟子たちは宣教活動をしなから、まだまだ不十分であった復活したイエスへの信仰を固めていったのです。

イエスが天に昇られ、目で見える姿では弟子たちの前からいなくなりましたが、弟子たちはイエスが共に働くことを、全世界で、すべての造られたものに感じ取ります。福音を伝え続ける中で、弟子たちは復活したイエスとの絆をますます強めていく。イエスは、弟子たちを育てるにあたって、このような方法を好まれたのだと思います。

弟子たちの体験は、次の世代に受け継がれていきます。イエスが共にいなければ起こり得ない出来事を、次の世代も体験し、伝え続けていきます。それはわたしたちも同じことだと思います。わたしたちにとって、イエスがいなければ起こり得ない出来事は秘跡です。秘跡の恵みにあずかりながら、次の世代にも体験を語り継ぐ者となる必要があります。

イエスは天に昇られました。天に昇っても、イエスがわたしたちと共に働いてくださることを証しするのはわたしたちです。わたしたちが、イエスが共に働いてくださることを、イエスを知らない多くの人に、わたしたちの次の世代に、確信を持って知らせることができるように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 15:26-27;16:12-15)